

青森県医師会災害医療チーム(JMAT)へ参加して

Vol.6



(第7次派遣隊)

活動期間

平成 23 年 5 月 24 日～29 日

支援場所

岩手県立大槌高校救護所

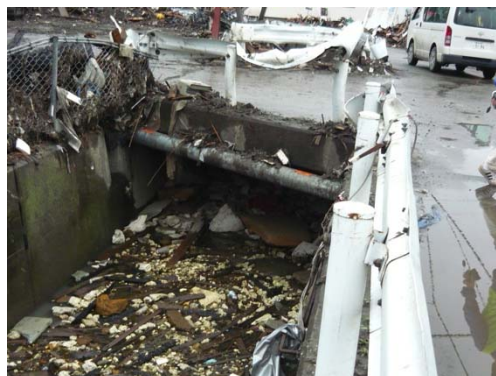
参加メンバー

坂本 賢	薬剤師	(株式会社町田アンド町田商会	サカエ薬局黒病前)
長尾勇志	薬剤師	(株式会社町田アンド町田商会	サカエ薬局金木)
黒滝誠浩	総務担当	(株式会社町田アンド町田商会	農事営業部)
藤田雄太	総務担当	(株式会社町田アンド町田商会	人事部)

● 被災地の状況

毎回感じるのですが、テレビ等のメディアからの情報と、実際に被災地へ足を運び、五感を使って体験するのとは、全く異なって感じられました。

たとえば、大槌町の海岸沿いを調査した際、いまだかつて嗅いだことのない悪臭が漂っていました。



津波によって打ちつけられた船、集積されたホタテの養殖用の網、漁港周辺の魚等の残骸、これらが悪臭の原因と考えられます。

漁港周辺のみならず、民家付近の用水路に溜まったヘドロ、倉庫や店舗の保冷庫から流れ着いたと思われる食品等も、悪臭を発生する要因かもしれません。

高台にある大槌高校避難所周辺でもハエなどの害虫、沿岸部のガレキ周辺ではブヨ等が大量発生していることがわかりました。

加えて漁港内の水溜りには、ウジなどもみられました。ブヨについては、沿岸部にのみ発生が多く確認されましたが、今後、避難所等にも飛来してくる可能性は否定できません。

現地では、天候によっても悪臭、害虫の状況は変化していました。メディアでも、悪臭、害虫問題について取りあげられていますが、上記のように想像しているものとは大きく異なっていました。

● 避難所・被災地の方々の声

大槌高校内の避難者やその周辺地域の方からお話を伺うと、

「仮設住宅にいつ入れるのか、またそこに入ってから生活」

「出来ればまた浜での暮らしをしたいが、三陸沖地震が予想されるため怖い」

「避難所内における夏場の高温対策」

「医療チームが居なくなったら不安」

「行政からは最高200万円までしかもらえない。しかし、家の修理の見積は800万円。全然足りない」



「町長、役場のスタッフが大量死んで行政が停滞している気がする」

「家庭菜園がしたい」

などの声を耳にすることができました。

「今後の生活への不安」「行政への不満」が多く聞かれました。

しかし、これらは、「我慢強い県民性」の現れではないでしょうか。

当然ですが、全てのニーズに対して、ボランティア団体、行政、自衛隊が対応することは不可能ですが、我慢するなら、行動してみる事を少しお伝えできたかと思います。

✓ ケース1：家庭菜園

「プランターでいいから野菜を育てたい」との要望が被災者の方からありました。

この要望には、「炊き出しの食材としての利用」は当然ですが、避難所暮らしの中での「心のケア」も含まれています。

しかし、全世帯分の土、プランター、苗等を準備し提供することは困難です。さらに、学校側からの了承なども必要となります。

そこで、私たちから、署名を集め、それを自治体（大槌町役場）へ届ける（陳情する）方法を提案させていただきました。

✓ ケース2：夜間の母子部屋

夜間に乳幼児が泣く事に対し、被災者から「泣かすな!」「うるさい!」など、心ない言葉が避難所内に響いていたようです。

これは、乳幼児を持つ母親からの話でした。

当時、大槌高校避難所には、8名の就学前の子供たちが避難所生活をしていました。

これは、第4次派遣隊（2011年5月13日～17日）からの案件で、愛知県保健師チームへ引き継いでいた内容でした。

5月中旬より、愛知県保健師チームは、遠野市に宿泊し、保健師チームの控室は朝から夕方までの使用となっていたため「夜間だけでも、保健師チームの控室を母子部屋に利用できないか?」と愛知県保健師チームへ相談したところ、利用希望者、年齢、人数など具体的な情報を把握した上で、さらに、避難所管理者からの申し入れであれば、学校、大槌町役場、愛知県への説明も出来るかもしれない、との返事をいただきました。

✓ ケース3：警備の依頼

私たちが、大槌高校にて活動している期間に多くの有名人が訪問されました。

通常、慰問、炊き出しボランティアなどは、ボランティアセンターを経由してから避難所へ連絡が入るのですが、このケースは被災した少年からの一通の手紙がきっかけで実現しました。そのため、「事務所側の意向」で極秘扱いとなっていたのですが、逆に口コミでこの情報が広まってしまいました。



少年が手紙を出した有名人は、5月28日（土）13時訪問予定でしたが、9時ごろには、避難所へ多くの人たちが集まり始めていました。

そのため学校前の公道には多くの一般車両が停まっており、物資を供給する自衛隊車両が通行出来なくなるという状況になりました。

避難所を警備していた北海道警察は、通常4名のところ、増員し対応しましたが、収集がつかない状況になりつつあり、避難所の被災者から「自衛隊にお願いしたら？」との声があがり、急遽医療スタッフが自衛隊へ直接協力をお願いする事になりました。

自衛隊はこれを快く受け入れ、車両の規制をしてくれました。

正午になると、さらに人は増え、対応が難しくなったため、私たち医療スタッフにも避難所管理者より警備の依頼がありました。

藤野医師の了解をいただき、「けが人を出さないため」5名が警備に当ることになり、救護所は、藤野医師、坂本の2名で対応することとしました。

結果的にけが人もなく、慰問は無事終了し、避難所管理者から私たちの対応に感謝されました。

長期化する避難所生活では、様々な事が起こり、不具合もあります。

しかし、簡単に諦めるのではなく、被災者の方々がアクションを起こし、多くの方に協力を依頼し、少しでも快適な避難所生活となるよう努力することが必要です。自らアクションを起こすことも、被災者の自立へつなぐと考えています。

- 救護所診療業務の終結に向けて

大槌高校での救護所診療業務は現在も続いている状況ですが、患者数は減少傾向となっています。5月中旬より積極的に「町の保険医療機関を受診するように」声掛けをした成果とも考えられます。

さらには、救護所から処方せんを発行すると自ら保険薬局へ持参される方もいました。

また、大槌高校救護所は6月上旬に診療を終了することも広く認知して頂いているようで、「次回からは近隣の医療機関へ受診するように」と医師からお伝えいただくことも増えているように感じられました。

今回は、青森県立中央病院チームの入れ替わりの日程上、診療業務ができない状況になる時間帯（26日午後から27日午前）が存在しました。

休診の旨を貼り紙で、避難所内外の方、避難所管理者、学校警備の方へ通知し、さらに近隣医療機関へ出向き、夜間急患の受け入れ態勢の確認を行いました。

しかし、実際は医師不在時間に受診希望者が何名かいました。



さらに、近隣保険医療機関への紹介は断られ、翌日にこちらの救護所を受診する方もみられました。

「いつでも診察を無償で受けることができる」「遠くの医療機関まで行く事が大変」という状況が、被災者、近隣住民に根付いてしまっていることを物語っています。

このままの状況では、「震災前の医療体制へ戻ること」「セルフメディケーション」へはほど遠いと思われます。

- 救急箱について

大槌高校救護所閉鎖後の大槌町では、休日夜間診療を受けることが難しい状況になります。

当然、いままでのように気軽に受診できなくなるため、個人の責任で健康を管理する必



要性、くわえて県立大槌仮設病院医療スタッフの負担軽減の目的から、一般用医薬品の利用促進は重要な課題だと思われます。

現在大槌町では、大槌高校下にある仮設のドラッグストアが営業しており、日中であればこちらで一般用医薬品を購入できますが、日中営業のみのため、夜間に一般用医薬品を購入できません。

そこで、医療チーム撤退後の、セルフメディケーションの必要性を視野にいれ、救急箱の設置（第4次派遣隊からの案件）をほぼ強制的に行いました。

薬効群としては、胃薬、風邪薬、鎮痛剤、下痢止め、子供用風邪薬の5種類をピックアップし、今後の管理方法について以下の内容でお伝えしました。

使用者を特定するために

救急箱の中には、使用する薬剤名・数量・使用者の氏名・生年月日を記載する用紙を準備し、使用した人を特定できるように設置しました。

これは、万が一症状が悪化し、長期間同効薬を使用していた場合の受診勧告、副作用等が発現した場合、また、被災者の体調管理のために保健師らへ利用してもらうため履歴を残すこととしました。

必要最小限の量

5種類の一般用医薬品に限定した理由は、他の外用薬（湿布、塗り薬、点眼など）、滋養強壮剤などは、気軽に持っていかれてしまい、本当に必要な被災者へ必要なときに使用できない恐れがあるためです。

また、救急箱内の医薬品は、「2、3名分が必要とする数量を入れておく」「設置時間帯は夕方から朝までとする」こととし最小限の量、最小の時間帯にするようお願いしました。

医薬品の供給方法

大槌町物資センターを確認した所、多くの一般用医薬品が備蓄されており、供給には問題ないと考えられます。

いままでは、釜石市災害対策本部の薬剤師へ依頼していましたが、必要なものは物資センターへ避難所管理者を通じて依頼することができることをお伝えしました。



医療チーム撤退後も救急箱の管理・補充等を行うボランティアを募集しましたが応募がなかったため、被災者の小林さんに救急箱の継続的な管理をお願い

しました。

救護所がある間の約2週間で、避難者への周知を行っていきたいと考えます。

● 日々変化する被災地の環境

3月中旬（第1次派遣）と5月（第7次派遣）における被災地（釜石市、大槌町）の環境を比較すると、釜石駅付近の海岸沿いはある程度、ガレキの撤去が進み、破損した車両は1カ所にまとめて並べられていました。

ガレキの撤去

しかし、釜石駅から大槌町へと向かう商店街を走ると、震災の爪跡は現在でもはっきりと残っていました。道路、歩道のガレキは撤去されていますが、道路脇の店舗、民家のガレキ撤去は依然進まず、「道路の確保」が優先されたことが理解できました。中には、自らの手で店舗のガレキを撤去し営業を再開した飲食店、スポーツ用品店もありました。しかし、全てのガレキを撤去し、街が復興するまでにはまだまだ時間が必要です。

店舗などの変化

大槌町を縦断する国道45号線沿いにあるガソリンスタンドは営業を再開していました。第1次派遣時に目の当たりにした1~2kmにも及んだ車両の列がまるで嘘だったかのように思えました。（大槌町で2カ所のガソリンスタンドの再開を確認しました。）

また、釜石駅周辺にあるスーパーマーケットは、青森のスーパーマーケットと遜色なく、こちらで大抵の食料や日用品等を調達することができました。

臭いの変化

海岸沿いに漂う臭いは、以前とは異なっていました。

地域により異なるかもしれませんが、3月中旬（第1次派遣）の山田町、大槌町では、「磯の香り」「ほこりっぽい」「火災後の焼け焦げた臭い」が混ざりあった臭いだったのに対し、今回の臭いは、「ヘドロからの臭い」「魚、貝類の腐敗臭」「漁具からの臭い」のように感じられ、「表現するには難しい臭い」へと変わっていました。



「表現するには難しい臭い」に加え、3月にはほとんど気にならなかった「害虫」という問題も気温が上昇するに伴い発生していました。

今後、防虫剤、殺虫剤、殺蛆剤などの医薬品や網戸、蚊帳、扇風機等が必要と考えられます。

避難所の室温を下げるためのグリーンカーテンなど、夏季に向かい、いままでとは異なるニーズが生まれてくると考えられます。

このように被災地では、日々改善に向かっている一方、新たな問題、ニーズが、発生していることを忘れてはいけません。

これらを解決するために、被災者らが考え、意見を出し、実行できる事が、自立へ向けた重要なステップになると考えています。

● おわりに

坂本、長尾は第4次派遣隊から、1週間あけて大槌高校救護所にて再び活動することとなりました。藤田は第1次派遣から約2ヶ月経過した時期に再び被災地へ行きました。黒滝は今回初めて派遣隊として参加しました。メンバーそれぞれが、様々な事を感じてきました。

また、今回の第7次派遣隊は、いままでとは違う条件での活動となりました。医療スタッフのメンバー構成や医師不在時の対応など、不安な点は多々ありましたが、無事、活動を終了することができました。

救護所利用者からは、青森県医療チームへの多くの感謝の言葉を頂きましたが、その一方、「遠い」「忙しい」などの理由で、救護所を継続的に利用している方々が多くいることも、徐々に理解することができました。

ある方との会話の中で、「避難者は始めは親切な人ばかりに思えたが間違っていた」との言葉から、長期に渡る避難所生活の難しさを感じました。

● 謝辞

青森県立中央病院医療チームの皆様へ

お互い急な派遣となり、普段の業務内容と異なり、戸惑いもあったかと思えます。

私たちは、一緒に業務をし、さまざまな方面から勉強させられることが多々ありました。葛西医師チーム、藤野医師チームとはそれぞれ3日間の短い期間ではありましたが、診療業務や毎日の食事準備等では大変お世話になりました。

本当にありがとうございました。

町田アンド町田商会社員の皆様へ

町田社長をはじめ、坂本副社長、村上専務、そして町田アンド町田商会社員の皆様には朝早くから我々の出発を見送っていただきありがとうございます。

支援活動中にご心配をおかけしたかとは思いますが、町田アンド町田商会の代表として一生懸命活動してまいりました。これも皆様のご支援があつてこそと思っております。ありがとうございました。



青森県立中央病院医療チーム

左

5月24日～26日

葛西医師チーム

下

5月27日～29日

藤野医師チーム

